

沖

3
2021

俳句雑誌[315]



寒中の芽

能村 研三

地べたの句

書齋の袖の柱に今年も「俳句の日めくり」を掛けた。忙しくて、何日か一緒にめぐることもあるが、宇多喜代子さんの鑑賞文を合わせて読むのが毎日の楽しみでもある。三月五日は啓蟄で先師登四郎の句が掲載されている。

啓蟄や地べたてふ語のなつかしき

登四郎

この日の、宇多喜代子さんの鑑賞は次のように書かれている。

「暖かくなり、冬ごもりをしていた虫や動物たちが目覚めて出てくること。これが啓蟄です。啓蟄の話をしていて、誰かが『地べた』と言ったのでしよう。昔は何かにつけてよく使った言葉だが、そんな郷愁を感じさせます。」

地べたは、地面のことだが、俳句では「地面」という言葉で詠むよりも「地べた」で詠んだ句の方が圧倒的に多いように思う。

「地べた」とは、辞書によると土「地の表面。地面のくだけた言い方」とある。さらに「すきまのないさま」「一

杣道の細きを行くも恵方かな

初 茜 海 鵜 十 字 の 翼 張 る

読 初 に 朱 線 ま み れ の 古 書 を 買 ぶ

初 刷 は 単 襲 の 折 り 目 かな

鏡 餅 罇 の は し り は 吉 兆 かな

松 籟 を 身 ぬ ち に 鎮 め 弓 始

捨 灰 の 土 に 育 ち し 芽 水 仙

見 霽 か す 岬 こ こ ろ に 寒 稽 古

皿 小 鉢 使 は ず 捨 て ず 寒 土 用

寒 中 の 芽 に し て 朴 は 天 を 指 す

面に広がっているさま」と説明がある。地(地面)のありようを強調して、

広がりを表す「べた」を付けて「地べた」というようになったのだと言われている。

地べたを詠んだ句を探してみたらこんな句があった。

春時きの種ひと揃ひ地べたに置く

本宮 哲郎

正月の地べたを使ふ遊びかな

茨木 和生

荒縄が地べたをすべりくる小春

藤本美和子

石段のはじめは地べた秋祭

三橋 敏雄

爆竹を痛がる地べた春近し

小川 軽舟

私の句にも「地べた」の句があった。

腕立て伏せ地べたに尽きて

あたたかし 研一

この句も季語は「あたたかし」で登四郎の句と同じ三月の句である。

能村 研一

能村 研三

狼のゐるを信じて山拝む
ぬくもりの言葉を探し落葉搔く
祝ぎ詞選び損ねて女正月
冬木立時空斜めに一羽翔つ
俎板に寝て寒鯉の大欠伸
臘梅の枝箸置きに今朝の宿
鳥声に真似たる笛も探梅行

大寒の頃、春を待ち遠しく感じる心皆同じであろう。「冬来たりなば春遠からじ」と言う昔の人の言葉にすがっている。それでも、暦の上では間違いない春はやって来るのであるが、北国の人々にとってはむしろこれからが冬本番という思いに違いない。

登四郎先生に「うしろ手に扉をしめ冬の去る思ひ」という句がある。その自註に「冬の寒さにもっとも弱い私は二月が終わるのが待ち遠しい。何かしらほっとした気持を詠った」とある。寒がりの先生の姿が目に見えるようであるが、私には都会人と雪国人の違いをみる思いがする。暦とは関係なく、雪が消えて初めて春を実感する人に対して、梅が咲いても寒い日が続き、三寒四温のような日々に一喜一憂する都会の人の姿である。そう言えば、東京へ来て初めて木枯しに遇った時、吹雪の中にいるよりも冷たく感じたことを思い出す。

蒼茫集

野 生

辻美奈子

*球体は野生のかたち星凍つる
手袋の片割れに遥かなる旅
あかんぼの初泣きのそのめいつばい
つやつやとあり文旦のつらのかは
男手は文旦を剥くためにある
我が知らぬ未来マフラ―に黒髪に

うそほんと

田所節子

独り寝の耳しんしんと冴えにけり
*うそほんとポインセチアの真つ赤なり
夫のぬぬことの不思議な初あかり
遠き日を引き寄せて咲く冬至梅
知らぬ間に日が過ぎ迎ふ喪正月
酒待たせからからと炒る零余子かな

追憶の坂

千田百里

梅探る追憶の坂
父母の坂
熊を抱く山ふところと言ふところ
人日や紆余曲折の螺旋階
トートバッグの春待つ肩を滑るなり
*三寒四温てふ人の世に似たるもの
籠り居の繭ごもりめく春障子

初 茜

吉田政江

遠目せる神鵜の海の初明り
一望の刈り株の列去年今年
初茜筑波二峰はむらさきに
松が枝の風の形や冬岬
*つくばならひぐいと帆船の向き変はる
水に浮きくる七草の灰汁淡し

人いつか

荒井千佐代

磔像の背後は闇や弥撒始
揚船に赤子を寝かせ磯菜摘む
紛れなく隠れの血すぢ梟啼く
元朝の川底見せて被爆川
祈る手はハライソへ向け冬銀河
*人いつか一壺となりて春の星

寒の 대기

甲州千草

*漂泊の寒の 대기を換気とす
氷点下指先覚ます朝の水
湯煎にてほぐす蜂蜜寒の入
文旦のごろり売る気のありやある
如月や島の日零すオリーブ油
猫柳をんなの意地のなめらかさ

潮鳴集

冬かもめ

井原美鳥

風花が先駆け、峡の灯油売
枝鳴りは風の存問、冬木の芽
銃創は豆ほどの穴、鴨捌く
捌く刃にかちりと弾や鴨の肉
晴れて白曇りて、真白冬かもめ

時の運

菊川俊朗

車屋の赤き膝掛しぐれけり
* 家中が着ぶくれてをり、家族なり
寒の水ごとく、勝負は時の運
しばらくは海に染まらず、冬の川
鯨来るかつて、夢見し鯨捕り

雪霏々と

くどうひろこ

狸寄るあかり一つの無人駅
* 雪霏々とじやわらじやわらの津軽三味
冬ぬくし腕やはらかく巫女の舞
凍つる日の土てらてらと笑ひだす
いつまでも祈りの太鼓浜、どんど

山頭火

平松うさぎ

* 凍星を追ふ旅であり、山頭火
岬鼻の沖を鯨の尾が打ちぬ
初天神牛の脛の垂る日和
寒鯉の夢のひとつぶ吐き出しぬ
生家の鍵残るかぎ、東冬の星

駅前ポスト

佐藤克江

金色の冬日や立木、観音像
冬日受け、鴉くちばし光らせる
* 十二月来たり、駅前ポスト赤
ぬばたまの闇なき暮し年つまる
歳晩のやかんは鳴きて我を呼ぶ

愉楽

新井千瑳子

冬暖か逝くを着地と言ひなして
七草菜摘めば、傍ら妣の来る
* 柚子一顆多彩に使ひ切る、愉楽
午後二時の陽射し、動かぬ鴨の群
春待てり和紙のスタンド灯の透きて

木霊して

大久保志遼

* 木霊して、木曾は木の国、斧始め
地歌舞伎や、柵の音透る、中山道
朝市や、氷柱付きたる菜の並ぶ
木地を挽くひと、足ごとに凍解くる
大鋸に挽き込む、雪解水の音

風花

森村江風

南国の日の恋しくて、朱欒割る
また一枚心剥さる、除夜の鐘
ぬばたまの暁闇よりの、初鴉
天地の境押し上ぐ、霜柱
* 風花の一片ほどの一会かな

海鳴る

小坂尚子

懐しき音を賜り、落葉踏む
極月や、ミシンの糸の切れやすく
牛はみな牛舎へ、帰り、枯野星
缶切りのかすかな音や、風邪心地
* 吹雪く夜は、枕歌のやうに海の鳴る

懐深く

本池美佐子

長老は話好きなり、鳥糞松
* 日溜りの懐深く、冬の蜂
茶の花や、今は使はぬ、勝手口
一切の音を拒みて、雪女郎
春待つや、大河は水を湛へつつ

沖作品



能村研三選

水鳥の陣取る杭のひと並び

千葉

牛島 晃江

* 冬干潟生命体は皆必死
嘴を差し漁りしてゐる冬干潟
群千鳥光と影をひるがへし
海底へ続く風紋冬渚

里村 梨邨

切り株に座して冬日を味はへり
品書の墨太々と鰯大根
雪吊や男結びのゆるぎなし

栃木

五十畑悦雄

* 果てぬ間のほむら紫牡丹焚
笹鳴きや抜け道多き漁師町
柚子風呂にひたす総身の浮力かな
まさをなる空を吉とし初山河
樅や母の見上ぐる子の背丈
一行の金言重し初曆

熊本

石橋みどり

人参を間引く力の柔らかかき

市川市

澤田 英紀

* 天つ風磨く星々冴ゆるなり
鐘声の余韻の長き冬至かな
一陽来復朱雀となる入日
初神銭結ひたる枝の清々し
昭和より通ふ床屋や冬至の日

青森

工藤 邦子

諦念の貌で鮫鰯吊られをり
* おでん酒ふるさと遠き人ばかり
月冴ゆる邪気を鎮むる露天風呂
着ぶくれて同じ話にうなづきぬ
* わらづとに孤高を持する寒牡丹
みどり児の眼と光り合ふ恵方道

東京

岩波 浩庸

一椀の雑煮つやつや日を宿す
どの道も寒夕焼の影を引き
ビル街を自由奔放風花す

極月のぴんと張りたる空青し
挨拶の身振り手ぶりの寒さかな

熊本

石橋みどり

* 凧の一村の木を巻き上げて
木枯や気付けば我も高齢者
無言とはやさしき言葉シクラメン

千葉

古谷由紀子

玉砂利の音も幽し冬桜
天辺のどれも円やか枯木山
* 探梅ややうやう土のゆるみたり
六度目の干支やや嬉し初手水
空の青かすかに淡し春近し
捕獲なき神鵜大社の奉告祭

石川

坂下 成紘

* 主なき竹籠重し鵜捕部
神の鵜の形代捧げ新嘗祭
鰯網を零れし雑魚に群れ鷗
鰯豊漁活気溢れて止めの市

千葉

浜崎喜美子

* 大根炊き日がな一日使ひ切り
若水や溢るる茶の香寿げり
肅肅と吉書の墨を摺り無言
鬼火舞ひ雲立ちのぼる初浅間
初春や折紙の丑金と銀

沼の鳥見て来し夜や根深汁

関 妙子

* 渋色の寒菊となり雲流る
極月や土星ゆるりと日を廻り
冬シャツの風に対峙の反骨心
牡蠣打の食はず嫌ひの牡蠣を打ち

埼玉

浜田はるみ

* 銀杏裸木ほんたうの空の青
綿虫を捉へてみれば空一片
煎餅のぱりんと割るる空つ風
冬麗の空へバンジージャンプかな

岩手

中野 忠志

* 鷹匠の差し出す腕に気脈あり
反骨と頑固は違ふ鏡餅
悴みて箸ままならず骨拾ふ
地吹雪の渦巻く中に人の影
レコードの小さき疵音聖誕祭
風花や玉砂利きしむ祢宜の杵
強霜の鶏舎にきしむ蝶番

神奈川

加賀 荘介

* 新雪を往き足跡の一行詩
ちちははに先づはまぬらす井華水
いづくより来て冬蝶の風まかせ
* 凧や遠き地の香を連れてくる
曖昧な記憶を辿る雪の窓

千葉

江森 悦子

飛鷹選評



能村 研三

冬 干潟 生命体は皆必死 牛島 晃江

牛島さんは千葉市にお住まいの方。近くには谷津干潟や行徳鳥獣保護区などがある。海風の冷たい冬の干潟は人影も絶え草木も枯れ果てて寂しげな情景が広がっている。渡り鳥たちが広い干潟に集まって長い旅の途中に翼を休ませている。冬の寒さの中、命のあるものは必死で生きようとする力強さがある。私たち人間も今、コロナの感染に怯えながらも必死で生きることが、重なって見えてくる。

果てぬ間のほむら紫牡丹焚 里村 梨邨

里村さんは現在館山支部に所属されているが、館山支部の方々は近くで行われた牡丹焚の吟行をされたようだ。牡丹焚を最初に俳句に詠んだのは原石鼎だそうで、へ煙なき牡丹焚火の焰かなという句を残している。焚いた火の色はかすかに緑色となったり紫色が現れたりして、終わりが近づくと紫色がかかった青い炎がさかんに見え始める。こうした色は牡丹を焚くときにかかれない色だそう。

仏飯もさみどり色の七日粥 五十畑悦雄

毎日、朝食前に仏前に感謝の意を込めてお供えする仏飯、今

日は七日の七草粥の日なので、仏飯に代わって七草粥をお供えすることにした。芹、薺、御形、繁蓼、仏座、菘、蘿蔔、この七つの野菜にお餅を入れた七草粥。さみどり色の七草粥を仏様もさぞ喜んでおられることだろう。

天つ風磨く星々冴ゆるなり 澤田 英紀

「天つ風」とは空を吹く風という意だが、百人一首の「天つ風雲のかよひ路吹きとちよ乙女の姿しほしとどめむ」で馴染みがある言葉。寒気にくつきりと冴えわたって見える冬の星々は一層磨かれて光を放っている。「天つ風」を上五に置いて星の光も神々しさを増した。

おでん酒ふるさと遠き人ばかり 工藤 邦子

屋台の飲み屋でおでんをつつきながら酒を酌み交わしているのだろうか。大鍋でどかどかと作るおでんは庶民にとって親しみ深いもの。「おでん」の持つ庶民性から、ふとお互いに遠くになってしまったふるさとの思い出話に花が咲いた。

わらづとに孤高を持する寒牡丹 岩波 博庸

凍てつくような寒空の中で薬苞に守られながらひっそりと咲く寒牡丹の可憐さに心を打たれた。しっかりと薬苞に包まれているので、周りの草木とは疎遠で、超然として一花を咲かせた。

木枯や気付けば我も高齢者 石橋みどり

石橋さんとは私もほぼ同年齢なので、この思いはよく理解できる。コロナ禍で日常生活の歯車が狂っている時は、月日の流れもことのほか早く、いつまでも若いと思っていたが、気がついてみると高齢者と呼ばれる一人になっていた。